

やぶなべ

青森県立青森高等学校生物部 発行

誌名	やぶなべ
号/発行年/頁	3 / 1957 / 8-10
タイトル	ゴマの随想
著者名	室谷洋司

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

ゴマの随想 室谷洋司

ゴマシジミの生活史は驚異に溢れている。1953年の夏であったろうか、初めて本種の子を飼にしたのであった。棲息地が高段された温泉である為当時の採集範囲外にあったものらしい。争実翌年は又の蹟近く、そして毎年のように数10頭の採集が可能であった。当時のある書物は「本種は幼虫期間アリと天棲する」と書いていたのを目にし、その語句は一層観察意欲を高めてくれた。

産卵を確認したのは1954年のことであった。それ以前にも産卵動作を見たことはあったが、本種は、蕾内に深く産卵管を挿入し争を築るので、その頃の自分には発見出来なかつたのである。当時の成虫以外にゴマシジミを見ていたのは、9月の蕾内の1～3令幼虫であったと思う。以上の様な次第で本種生活史についての本格的調査は1955年のシーズンからと云えよう。

草食期幼虫をシマレー内で飼育すると、4mm程の暗赤色の幼虫が蕾外に這い出る。当初は食草の關係と思つたが、違つたらしい。これについて東京の蝶研究家林慶氏に早速向合せたら、それが脱出期の幼虫で、アリ巣に入る準備の出来たものであると云う。発生地は登り下りの自宅から2km程遠隔の地であつたが、それからは阿蘭と根掘りを持って、毎放課後出掛けてアリ巣発見に努力した。発見は予想外の困難を伴つた。8月の中旬から始めて一週間、相続く失敗にやむを得ず鋏を持参しての強行探索となつた。出来る限り地表を掘り返すのである。当温泉には私の目には5種類のアリが棲息していたので、以前に林慶氏から伺つたこと～日本のゴマシジミについては、青森の石村清氏が初めて明らかにした～を思い出し、5種のアリを石村氏に送つて見た。返事は快くはぬ返つて来た。

それによると〇〇番のアリであると云う。(即ち〇〇番が *Myrmica* 属の一種で、氏はそのアリとゴマについて観察なされた。)世は実に皮肉なもので、返争と氏着の文献を受け取る数日前、即ち9月の初めに辛うじて土中にひき立つ赤いゴマ幼虫に観察し、石膏の人工巢で飼育を実験中であつた。しかし、研究と云うものは、先人の基礎の上により深く物を究めてこそ成立つものである。争実、もしこれ等の参考文献なくしては、決して2、3年の短期間にその全貌なりとも不可能であつたろう。当文献に依れば、氏調査地は温泉地帯であり、概してアリ巣は排水の良い地点に多いと云う。

以後からは隆起点を目印に数コロニーを発掘出来たし、発生地の保護にも乗り出すことが出来た。ギ酸<HCOOH>と云うものはアリが持っているから、蟻酸と称すのだそうで、アリのコロニーを掘り当て、次の作業—吸虫管でアリの成虫、幼虫を採集する—では非常に刺激性の匂いがあつた。(温泉の地表は極度に土が腐蝕しており、カビも多かつた。)一息吸う度につばを吐き、それで我慢したが……。ナガボノシロワレモコウ(後で知つた名前である

ゴマを前期幼虫は食すが、当時の幼虫と、アリ巣内のそれは遙かに後者の方が、色あざやかな淡赤色を呈し、黒い土と、アリ成虫の褐色、アリ幼虫の白色が良く調和している。

この様にして、1956年度は漸く前期生活史を青森県理科教育研究会の発表会で報告することが出来た。

部では冬の迫りつゝあるその頃、恒温器でシヨウジヨウバエを飼育中であつた、自分の思うには、一般に蝶は幼虫期を植物と共に暮す。依つて当地の様な雪の多い、寒い冬は、一時草木を枯れさせ生物はなんらかの形で越冬しようと努める。生物界というものは美によく自然に適應しているもので蝶と蛹、幼虫、蛹あるいは一部のものにえられる成虫で眠りに陥るのが常である。しかしいずれに於いても活動は中断され、又そうせざるを得ないのである。恒温装置により被害生存のアリ、寄生者のゴマ幼虫と共に飼育することによって冬季飼育は



— ぬんぬん おころり —

アリはゴマ子さんを自分の家へ連れていった。

不可能なものであろうか、自宅の人工巢では管理不十分がアリ、ゴマの死を導き、幼虫は液漬標本に供されていた。初雪の降る日、手袋を両手に鋏を肩に発生地へゴマ発地へ行って見た。僅かの晴間の後は又吹雪く。発地はなによりも増して困難なものであり、まして悪条件下に於いては尚更のことであろう。遅良く地表は露出しているので、2、3時間まで冬眠中の彼女等を発見した。ゴマは子アリと共に、親アリと共に地表のすぐ下に、草の根やナメクジに附着していた。早速吸虫管で出来るだけ多く採る。家の中ではやはり温度が上昇したと思われ、アリは辛じて腹を動かす事は出来た。ゴマは不動の体。この様にして翌日恒温器内のシヨウジヨウバエに仲間入りしたわけである。果して結果は………良好であつた。数時間後には活動を始めていた。1週間と順調で親アリも砂糖をナメていた。ゴマ幼虫も生気を復したようである。

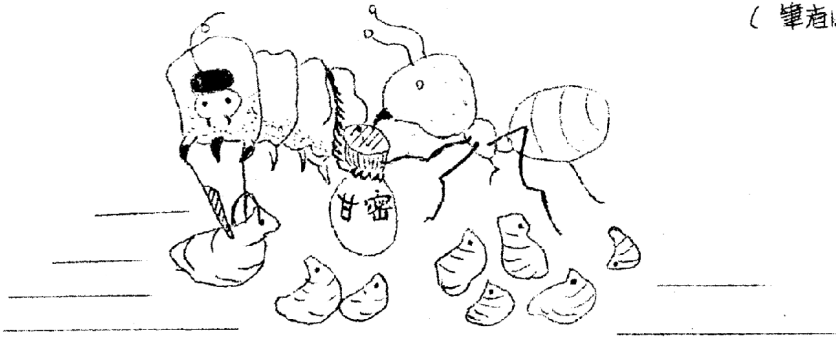
そして私のはかない望みは — 孵化 — 寒中の孵化である。しかし数日にして温度調節の困難を身にしみて感じた。人工巢内は美に乾燥がひどく採集した土に細菌が附着していたようであり、シヨウジヨウバエの25°Cの適温に忽ちカビがはびこつた。土の代りに脱脂綿等を入れたにも拘らず、確かに12月24日であつたろうか、約1ヶ月にして恒温器の故障を全滅してしまつたのには泣かさず。今でも成功の自信は持つており、今後どうさせたいと考えている。5月、若葉が萌え始め、発生地と草木の伸張と共に湿度、湿度を増し、6月上旬眠りから覚めた。ゴマはその後の地表面へのアリ巣の移動に伴つて、相変わらず鬼の習性で成長していった。5月のある日なんと云う事だろう。折から西風の乾風は、幼少時からの親近感のこもる朝日山一帯を灰と消失させた。ゴマは幸運児であつた。湿地の産地から………。これは不幸の中にも辛じて一つの望みを与えられたような気がした。8月は広い湿度の至る所に、青い々、赤い々、ギボ

ウシ、オニユリ、その他秋の野草に色彩られ、その上を特徴のあるゴマは花齧する身となっていた。

蚊に悩まされ、暑さに圧倒されついで、1957年ゴマの発見数は10に満たなかった。もしや昨年の環境破ガイで減少の途を辿ったのではないかと云う考えも上記の様な次第で心配まで至らなかった。まだ々ゴマは我々に彼女の驚異を究めてくれという資料の提供は惜しまなかった。三年間自分の研究観察は本稿を中心とした各種の生態であったが、1957年度の變いは、ゴマシジミの生活をカラーフィルムに収めたいと云うことであつた。

なんと云つてもゴマについては全貌を知り得たに過ぎない。今後の調査に一層の努力を注がねばならない。

(筆者は三年)



親アリ : オオ、うまい密じや

ゴマ子 : やつと子アリの食争にありついたワイ

— 虫界の不思議 —

正 誤 表

原本に「正誤表」が付属している場合、該当部分を以下に転記しています。「行」は、原則としてタイトル行なども含む上からの行数です。「u」が付く場合は下からの行数です。）

頁	行	誤	正
8	10	3♂	3令
8	24	観喜	歓喜
8	27	成立つ	成り立つ
9	11	誤字(蛹の虫偏が「日」になっている)	蛹
9	24	生気を復した	生気を回復した
10	6	本稿	本種
10	㊦	うまい密	うまい蜜